

言葉を使って思いを伝える国語科授業実践

－伝え合う力を高める指導のために－

M12EP009

内藤茂樹

1. はじめに

これまでの現場での経験から感じている児童の様子として、

○自分の言いたいことが相手に伝わらない。
場合によってはそれによってトラブルになる。

○言いたいことがあるが、言葉として言い表せない。

○言いたいことはあるが、言いたいことから思いついた順に話してしまい伝わりにくい。

○自分の考えを言うことはできるが、言いつばなしで、話し合いにならない。

など、伝え合いがうまくいっていないことが挙げられる。あと少し言葉を足せば伝わるのに、もう少し順序良く話せば伝わるのに、ということがよくある。また、高学年になると、

○恥ずかしがる。

○話したがらない。

○声が小さくなる。

といった発達段階特有の傾向が表れる。これは、2012年度の教職大学院での連携協力校観察実習においても見てとれたことである。5年生の1分間スピーチを継続観察した際、児童が、下向き加減で、しかも小さい声でスピーチをしていて、内容を聞き取れないことがあった。せっかくいいことを考えていても、また話していても、相手に伝わりにくいことがある。そんな児童に対して、相手に自分の思いを伝えられることの良さを知ってほしいと考えていた。

伝え合う力を高めるということは、学習指導要領の国語科の目標に「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力

を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」と示されている。

また、伝え合う力を高めるために必要な言語能力を育成することに関わって、言語活動の充実が総則に明記され、各教科・領域での言語活動例もたくさん示されている。文科省から出されている『言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】』の第2章には、知的活動（論理や思考）を行う際には、「事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること」「事実等を解釈するとともに、考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること」と書かれている。また、コミュニケーションや感性・情緒に関する指導を行う際には、「コミュニケーションは、人々の共同生活を豊かなものにするため、個々人が他者との対話を通して考えを明確にし、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重していくようにすること」「感性や情緒を育み、人間関係が豊かなものとなるよう、体験したことや事象との関わり、人間関係、所属する文化の中で感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすること」といった言語活動を充実させるようにと示されている。このように、伝え合う力は、国語科はもちろん他の教科・領域や日常生活場面でも必要となる力である。そして、事実や考えを伝え合い、コミュニケーションをとることができる児童の育成が求められているのである。

そこで、本研究においては、児童が自分の伝えたいことを相手や目的に応じて適切に表現できるように、また伝えられることで喜びを味わうことができるように指導のあり方を

研究する。伝え合うためには、話す・聞く・読む・書くなど様々な手段があるが、今年度は、児童が実生活で最もよく使うであろう話すことに焦点を当てて研究を行い、来年度は聞くことにも焦点を当てて、伝え合う力を高める指導のあり方を探りたい。

2. 研究の目的

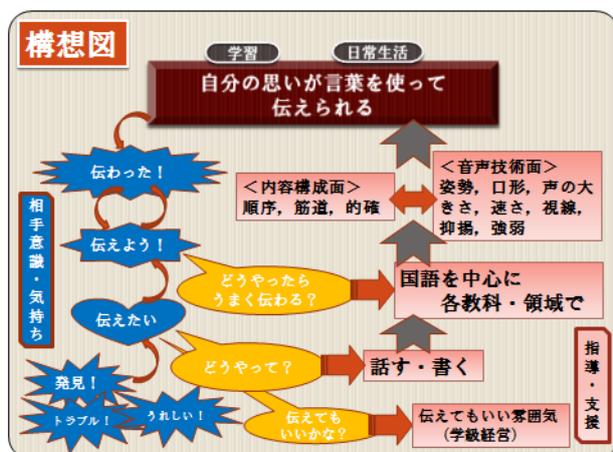
- (1) 児童の話し方にかかわる実態と意識をつかむ。
- (2) 自分が伝えたいことを適切に話して伝える力を育成するための手立てを考え、授業実践を通してよりよい指導のあり方を探る。

3. 研究の方法

連携協力校である公立小学校の5年1組の児童を対象に行う。

- (1) アンケートをもとに、話すことにかかわる児童の実態と意識をつかむ。
- (2) 「話すこと」にかかわる国語科授業を行い、自分が伝えたいことを適切に話して伝えることができるようにするための手立てを考える。
- (3) 授業感想などの学習履歴をもとに児童の意識やパフォーマンスの変容を分析する。

【図1：研究構想図】



以下に授業実践の単元について記す。

◆めざす言語能力

自分の考えをまとめて伝えたり、友達の考えを聞いたりする力(「A話すこと聞くこと」A・イ)

◆教材名

「豊かな言葉の使い手になるためには」
 「インターネットを使って調べる」
 「話し合うために大切な言葉」

(光村図書 5年銀河)

◆指導の目標

◎話題を決めて、収集した知識や情報を関連づけ、分かりやすく発表することができる。

○言葉の使い方について関心をもつことができる。

◆この単元の特徴(なぜこの単元を重視したか)

授業実践を行う際にこの単元を選んだのは、児童が「話して伝える力」を伸ばすためにとっても有効なものとして位置づけられると考えたからである。

この単元は、豊かな言葉の使い手とはどんな人かという問いかけから始まる。それを受け、まず児童は、豊かな言葉の使い手だと思う人を選び、その人が言葉を使って伝えるということについてどんな考えをもっているのか、どんなことに気をつけているのかといったことを調べる。次に、調べたことをもとにして、言葉を使って伝えるために自分にもできそうなことを考え、発表する。実際に発表するということは、言葉を使って伝えることを自ら実演することになる。このように、この教材自体が「話して伝える力」について児童自らが考え、考えたことを児童自らが実際に「話して伝える」という実演＝パフォーマンスを伴うことで成り立つものとなっている。よって、単元を通じた学習活動すべてが児童の「話して伝える力」の意識化や獲得をめぐる練習広げられるものとなる。

このような点から、この単元は児童の「話

して伝える力」を伸ばすために有効でかつ要となる単元であると考え、授業実践を行った。

◆指導計画

次	時	学習活動
1	1	アンケート に答える。
	2	単元名・リード文を読んで、学習課題を設定し、見通しをもつ。
	3	「豊かな言葉の使い手」＝「 上手に話して伝えることができる人 」から想起する人物とその理由をマップに表し、みんなの考えも視野に入れつつ、自分の課題を決める。
	4 5	自分の課題について文献やインターネットなどで調べたり、インタビューしたりする。 調べたことの中から、次時にグループで出し合うことをまとめる。
2	6	グループになり、それぞれが調べたことを出し合い 、「上手に話して伝えることができるために」大事なことを自分たちなりにできることを考え、ワークシートに書き出しながら整理する。
	7 8	調べて考えたこと、自分が努力しようと思うことについて、クラスの友達に伝えるために構成や表現を工夫して各自でワークシートに文章を書く。

3	9	クラスの友達に自分の考えを伝える発表の練習をする。(グループ内で相互に発表を見合う。)
	10 11	自分の考えをクラスの友達に発表する。また、友達の考えを聞き、よかったことや感想などをワークシートにメモし、伝え合う。
4	12	発表時の友達からの評価を見て、自分の考えが相手に伝わったかを振り返る。 学習全体を振り返り、感想を書く。

※下線部は、学習履歴のデータとなる部分。

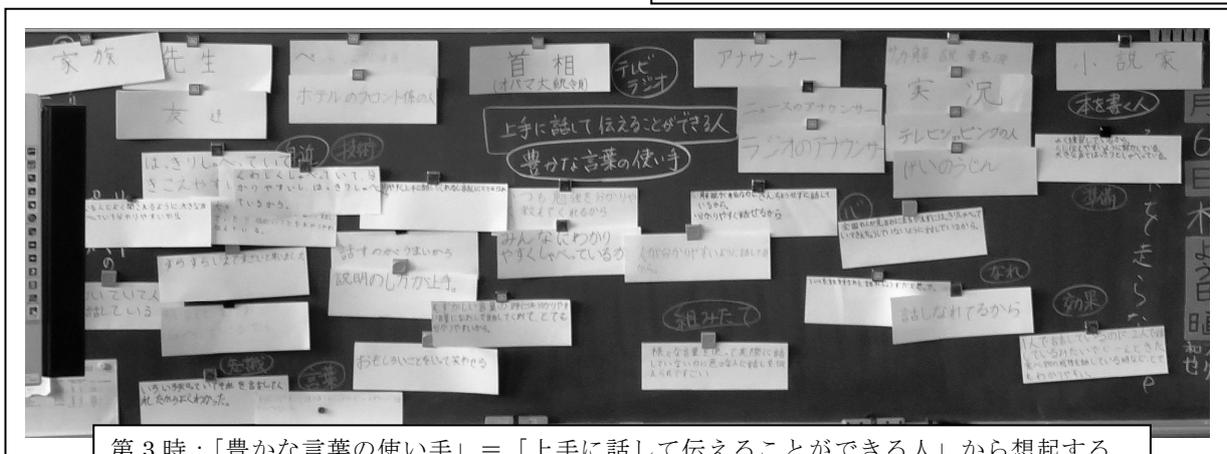
太字は、指導書の内容を変更した部分。

4. 研究の成果と結果・考察

(1) 話すことにかかわるアンケート(第1時)からわかる児童の実態・意識について

<話すことについてのアンケートの集計結果>

好 き：1人
(自分の考えを伝えられる)
どちらかという好き：2人
(みんなに聞いてもらえる意外とおもしろい)
どちらかという好きではない：11人
(緊張する、恥ずかしい)
好きではない：10人
(緊張する、間違えることが嫌、変なことを言って笑われるのが嫌)
※カッコ内は理由



第3時：「豊かな言葉の使い手」＝「上手に話して伝えることができる人」から想起する人物とその理由をマップにして黒板に掲示したもの

アンケートで話すことについて質問したところ、24人中21人が話すことを好きではない、またはどちらかというところ好きではない、と答えている。このクラスの実態として、話すことについては消極的な意識をもつ児童が多いことがわかる。そして、話すことが好きではない理由としては、緊張することや間違いを恐れること、笑われるのが嫌なことが多く、5年生という発達段階を考えると当然の理由であることが見えてくる。

(2) 自分が伝えたいことを適切に話して伝えるための手立てについて

本単元を指導する際に
教師が意識的に留意した手立て

【手立て①】「話す」ための意識を高める。

相手意識・目的意識・場面状況意識を明確にしておく。

【手立て②】「話す」内容を考える時間と材料を十分に取る。

1人では集められる材料が少ないので、グループワークを取り入れ、グループで話す材料を共有できるようにする。

【手立て③】自分の考えが聞き手に伝わるような内容構成の工夫ができるようにする。

話の展開（はじめ・中・終わり、起承転結など）や段落の始め方の文例（「話型」）を提示する。

【手立て④】自分の考えが聞き手に伝わるような音声技術の工夫ができるようにする。

話す様子（声の大きさや話す速さなど）を聞き手が評価する。また、ビデオで録画した映像をもとに話す様子を振り返る。

①「話す」意識を高めるために、単元の最初に「誰に」「どんな目的で」「どんな状況で」話すかという見通しを示した。

これによって、単元の最初に話す相手や目的、状況がわかったことで、児童はどんなこ

とをすれば最後に設定されている話す場面につなげることができるかを考えながら学習を進めることができた。

②話す材料を十分に確保できるように、調べた情報をグループ内（3～5人）で発表し合い共有する時間を設けた。

これによって、1人で調べただけでは本やインターネットからなかなか情報を得られなかった児童も、グループの友達の調べてわかったことを聞き、自分でも使える材料をメモすることができた。

③聞き手に考えが伝わるような発表になるために、自分の考えをまとめる文章の書き方を教科書から学んだ。（「選んだ理由」「調べてわかったこと」「調べたことから考えたこと（大事なこと）」「自分が努力しようと思うこと」という構成になっていることを確認。）その後自分の考えをまとめるワークシート（段落分けしたもの、文例を入れたもの）を配付した。

これによって、何をどう書いていいかわからない児童は、ワークシートの文例や教科書の書き方を模範として、割合スムーズに自分の考えを書き始めた児童が多かった。

④聞き手に考えが伝わるような発表になるために、まず、全体での発表の前にグループ内で相互に発表を見合う時間を設けた。

自分一人の練習ではなかなか気付くことができない音声技術面（声の大きさや話す速さなど）の改善点を児童相互にアドバイスすることができた。

次に、全体発表では、聞く側が発表者の音声技術面を中心に、発表（実演）の評価をワークシートに記入。そのワークシートを使って自分の発表について自分で振り返りをさせた。

すると、友達からの評価は、自分が思っていた評価と違い、どちらかというよりよい評価

■ 友達の発表のよかったところや発表を聞いた感想を書こう。

◆ 友達の発表を聞いてどう思ったかチェックしよう。(◎○△)

項目	◎	○	△
声の大きさ			
話す速さ			
口の大きさ			
視線(聞き手を見て)			
言葉の強弱			
伝えたい気持ち			

友達の発表を音声技術面で評価する欄

友達の考え(発表)を聞いて、メモしよう。

発表者

◇ 発表を聞いた友達の考えを書いておこう。

第 10, 11 時：全体発表で、聞く側が発表者の音声技術面を中心に、発表（実演）の評価を記入したワークシート

をもらった児童が多かった。児童にとっては、自分の発表を目に見える形で評価してあるので振り返りがしやすいようだった。

(3) 「話して伝えること」に関する児童の意識・パフォーマンスの変容 —授業感想などの学習履歴データをもとにして—

①児童Hの学習履歴データをもとにした分析

- 話すこと：好きではない
 - 気をつけていること：友達の顔を見ないようにしている
 - 調べた人：テレビショッピングの人
 - 発表内容
- 「人にものを買ってもらうための努力」
- 僕は豊かな言葉の使い手のことを考えると、テレビでよく見るジャパネットたかたの高田明という人が頭に浮かびました。僕はこの人の独特な話し方には練習や努力があるのか気になり調べてみました。
- 僕は、高田明の話し方についていろいろ調べてみ

た。

すると、高田明は商品の良いところを自分で確かめて、視聴者の心にいちばん響くポイントを考えてしゃべっていることがわかった。さらに、高田明はよく練習しているということがわかった。高田明は台本も無しにペラペラしゃべり続けたり、本番までの3分でも商品が変わったりすることがわかり、高田明はよく練習していることがわかった。

僕は、高田明は視聴者や商品への思いが強いためよく練習していたり商品を確認したりして上手な話し方になっていることがわかった。

僕は高田明から学んで自分が努力しようと思うことは、全校の前で発表したりみんなの前でなにかしゃべるときは前日によく練習したいです。

- 授業後の感想
- 友達の発表を聞いてみんなが考える豊かな言葉の使い手がわかった。友達やアナウンサーのことを豊かな言葉の使い手と考える人が多かった。豊かな言葉の使い手になるためには努力や練習が必要ながわかった。自分の発表はだめだったけど、次から

気をつければいいことがわかった。気をつければいいのは言葉の強弱ということがわかった。

【児童Hの発表と授業後の感想からの分析】

事前アンケートでは、緊張すると気持ち悪くなり、友達の顔を見られないくらい話すことが好きではなかったHさん。そこで調べた人は、相手を見て訴えかけるように話すテレビショッピングの人だった。しかも、かなり独特の話し方をすることが、その人を選んだ理由だった。調べた結果、よく練習するという技術面と相手への思いや話したいことへの思いという心情面との両面が大切であることを知ることができた。調べたことが影響したのか、発表の際には、少しではあるが意識的に友達を見ながら話すことができ、相手意識が高まったことがわかった。また、他者評価をもとに自分の発表を振り返り、強弱をつけるというこれからの課題を見つけることもできた。話すことに対して前向きになりつつあることがわかる。

②児童Rの学習履歴データをもとにした分析

- 話すこと：好きではない
- 気をつけていること：答えを考えておく
- 調べた人：アナウンサー
- 発表内容

私はアナウンサーについて調べました。理由は、日本全国の人が見るのに緊張してないようにニュースなどを伝えているからです。インターネットで調べて、気をつけていることやコツのついているサイトを見つけました。

そのサイトには気をつけていること、コツ以外にもアナウンサーになるために必要なことがつてありました。それはテレビが大好きなことと書いてありました。そのあとに、気をつけていることがたくさんつてありました。その中で私になるほどと思ったのは、なぜアナウンサーが前を向いてニュースなどを伝えているかという質問の答えです。それは、アナウンサーが前を向いて話しているのはテレビを見ている人、つまり相手の顔や目を見てお話ししよ

うとしているからです。皆さんもお話をするときに相手の顔や目を見ますよね。それと同じですと書いてありました。

これらのことから考えたのは二つあります。一つ目はアナウンサーはテレビを見ている人にわかりやすくニュースなどを伝えていることがわかりました。もう一つは、早口言葉や練習をしていることです。

つまり、豊かな言葉の使い手になるためには、地道に練習すること、そのことを心から好きになること、これが私が得た答えです。これから私は、早口言葉を練習したり発表の練習をしたり、アナウンサーのようにみんなにわかりやすくお話を伝えたいです。

●授業後の感想

この授業でわたしは豊かな言葉の使い手について知ったことがあります。わたしはアナウンサーについて調べていました。今まではアナウンサーについて無知で興味もあまりもっていませんでした。でもアナウンサーは思っていた仕事よりもずっと大変な仕事でした。アナウンサーはただ原稿を読んでいるだけなんだと思っていたけど、なるべく前を向いて話したりまちがえないようにいろいろなことを気をつけて読んでいることがわかりました。アナウンサーはじつは大変な仕事なのだとみんなに伝えたいと思いました。発表の時みんなの発表を聞いてへーとかなるほどと思うことがありました。わたしが知っていたことも詳しく説明していたので新たに知ったこともありました。この授業で知ったことをこれからいろいろと生かしていこうと思いました。

【児童Rの発表と授業後の感想からの分析】

話すことが好きではない自分とは対照的な存在で、話すことを仕事としているアナウンサーについて調べた。その理由は、自分は話すときに緊張するのに、アナウンサーは、緊張していないようだから、なぜなのか知りたいということだった。Rさんが自分を変えようとする気持ちがうかがえる。調べた結果、Rさんは、自分が思っていたよりアナウンサ

一の仕事が大変だということがわかった。それが「みんなに伝えたい」という思いにつながり、実際のRさんの発表は、声が普段の発表より大きくなり、音声技術面に良い影響が出たと思われる。単元を通して「話すこと」を好きになろう、知ったことを生かしていこうという前向きな気持ちが出てきたことがわかる。

③授業後の感想から見た児童全体の変容の分析

- ・緊張したけどみんなの方を向いて話すことに気がつけた。
- ・緊張したけどしっかりできた。

授業前は、緊張するという理由から人前で話すことが嫌な児童が多かった。しかし、この感想を見ると、そんな児童が話すことに少し意欲的になったことがわかる。

- ・聞こえているかを意識していきたい。
- ・発表がうまくなるようにしたい。
- ・わたしも真似をしたい。
- ・練習しようと思った。
- ・コツを調べようと思った。
- ・友達のいいところをたくさん見つけて真似したい。
- ・うまい人の真似をしたい。
- ・もっと発表を頑張ろうと思った。

最初のアンケートで、話すことに消極的だった児童がほとんどだったことを考えると、授業を通して、これからこうしたい、こうしようという前向きな気持ちをもつことができたということがわかる。

- ・友達に聞いた「大きな声」「考えてから話す」「みんなの方を向いて話す」も生かしていきたい。
- ・友達からの評価は自分が思っていたよりよかったのでうれしかった。
- ・友達からの評価も声の大きさなどよかったので、次は言葉の強弱に気をつけたい。

- ・感想の紙をもらって思ったことが二つあります。一つ目は視線のことについてです。僕も気をつけようと思っていただけ、どうしても下を向いてしまいました。もう一つは声の強弱についてです。僕はずっと同じようにしゃべってしまいました。
- ・視線と声の大きさと口の大きさが悪かったので次は直したい。

ワークシートに記された友達からの評価をもとに自分の発表を振り返ることができた。さらに、改善すべき自分の話し方の課題を見つけることもできた。

(4)授業実践全体を通して残された課題

上のような成果を得つつも、残された課題として以下の三つのことが指摘され得る。

まず、相手意識、目的意識、場面状況意識が児童の実態や興味関心に合っていることは、話すことに大きな影響を与える。授業で発表機会を設ける場合は、「伝えなければならない」という必然性をどう設定できるか熟考が必要である。

次に、発表など話したことはすぐに消えてしまうものなので、友達による他者評価をしたり、ビデオなどで記録しておいたり、後に振り返ることができるようにすることは、次回への課題発見やさらなる意欲向上につながるので、大切である。ただし、その記録したものの十分な活用については、今後さらなる研究が必要である。

最後に、授業後の感想を見ると、話すことに対する児童の意識が前向きになり、今後の意欲も向上していることがうかがえる。したがって、この単元を通して児童がもった意識や意欲を大切に、国語科の授業だけでなく、他の教科・領域のなかで、その意識や意欲を引き出せるように「話す」機会を意識的に設けるなどして支援を継続していくこと、そして、その都度、児童の話す様子をよく観察し、評価してあげることが必要だと考える。

5. 今後の課題

「話すこと」と「聞くこと」は、伝え合う力を高めるためには切り離せない。よって、今年度焦点を当てなかった「聞くこと」にかかわる指導の手立てを合わせて考えていかなければならない。今回は、グループ内での発表練習と全体の前での発表を「聞く」そして「評価する」という活動を取り入れはしたが、「聞くこと」それ自体をターゲットとした指導を十分に組み入れたものではなかったからだ。

さらに、伝え合う力とは、「言語を通して自分が伝えたいことを相手に伝えることができる力」、「言語を通して相手の伝えたいことを理解できる力」、「お互いに理解し合い、認め合いができる力」と捉えることができる。したがって、「聞くこと」によって相手の考えを理解する力をのばす手立てを考えていくことが大きな課題となる。なぜなら、相手の考えを理解する力を伸ばすことが、お互いに理解し合い、認め合うことができる力、すなわち、伝え合う力の育成につながるからである。

また、児童が「話したい」と思えるためには、相手が「聞いてくれる」という安心感がなければ話すことはできない。何でも話せる、よく聞いてくれるというような学級の雰囲気づくりも大切である。よって、伝え合う力を伸ばすためには、教科での指導だけでなく、普段の学級経営のあり方にも目を向けていく必要がある。

6. 終わりに

今回の実習は、とてもよい勉強になった。実習校のご配慮もあり、小学校1年生から6年生まですべての学年の児童の話す様子を観察することができた。そこから、児童の発達段階をおった話し方の特徴をおぼろげながら見いだすことができ、今後、指導の手立てを考える際に、大いに役立つと思われる。

また、言葉を使って自分の思いを伝えるこ

との楽しさを児童が味わい、もっと話したいと思えるようにするための何らかの手がかりを授業実践を通して得ることができた。

最後になりますが、大変お世話になりました実習校の校長先生はじめ諸先生方に心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

7. 引用文献, 参考文献

秋田喜代美(2006)「改訂版 授業研究と談話分析」NHK出版

秋田喜代美(2010)「教師の言葉とコミュニケーション」教育開発研究所

村松賢一(1999)「日常語の精練をへてパブリックな日本語を確立する」全国大学国語教育学会発表要旨集 99,192-195

山元悦子(1996)「対話指導のための基礎的研究—対話展開力をとらえる指標—」福岡教育大学紀要 45,第1分冊,27-42

米山誠(1986)「話すことの学習指導について—学習意欲を高めるための試み—」名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要 31,52-57

文部科学省(平成20年8月)「小学校学習指導要領解説 国語編」